



# 艦隊悪堕ち計画6

奪われた好意





ピル!

30分

「ただいまお散歩から戻りましたあ〜」  
「もうすぐ夏ですね！夜になったのに少し汗かいちゃいましたよ」  
「ワンちゃんも楽しかったみたいですよ♪いっぱい色んな人を笑顔にして♪」  
「ほら、ちゃんと帰ったらご主人様にご挨拶しないとダメだよ！  
もー、いつもちゃんと教えてるのにい！」

「そうそう♪ちゃんとご挨拶できて偉いねー♪  
提督はもう人じゃなくて照月のワンちゃんなんだから  
ちゃんと言うこと聞かないと捨てちゃうよ♪」  
「ふふっ♪じゃあ、ワンちゃんを犬小屋に戻してきますね…って、どうしたんですかご主人様？」  
「えっ!?今夜は照月がご主人様のお相手をするのですか!!わあ♥本当ですか!」  
「やったよ提督!ご主人様が照月のことを抱いてくれるんだって♥あっ、そうだ♪」

「提督、犬小屋に戻る前にご主人様が挿入しやすいよう  
照月の準備を手伝ってくれる?もちろん手伝ってくれるよね♥」

ジャア...

「いひひ、こうしていると本当のワンちゃんみたい♡」  
「んーん、自分じゃない人のセックスのために女の子のおマンコをペロペロしてるなんて  
ワンちゃん以下のゴミくずだよね♡」

「あっ♡いいよ♡パンツの上からペロペロ舐めて照月のおマンコを沢山濡らしてね♡」  
「直に舐めちゃダメだよ♡照月に許可なく触っていいのはご主人様だけなんだから♡」

ちゅ  
ちゅぽ

ぺろ  
ぺろ



「あんっ♡すっごいハアハア言ってる♪照月になじられて興奮しちゃったのかな？」  
「そうだよね♪提督はお散歩中もみんなに笑われて泣きながら勃起してるくらいの変態ワンちゃんだもんね♡」

んっ♡

「今だってほら♪その情けないおチンポを勃起させて…もしかして照月とシテみたいの♪」  
「あはは♪ワンちゃんのお癖に何言ってるの♪」  
「昔ならともかく今の照月はご主人様のモノで、提督とは絶対にセックスなんてしないよ♡」

ちゅ  
ちゅ  
ちゅ

んっ♡  
んっ♡  
んっ♡



「ほら、早く退いて！照月は今からご主人様に抱いてもらうんだから♡」  
「ふふっ♪じゃあご主人様♡最後の準備があるからちよっと待っていてくださいね♡」

「んっ、あっ、あっ♡…ふっ、っ♡もう十分かな」  
「もういっしょ提督♡照月のおマンコ、もう十分濡れたから♡」

じわっ







「あっ♡あんっ♡やっぱりすごい！照月の赤ちゃんの部屋まで届いて無理やりこじ開けてくる♡♡」  
「あっ…ううんっ♡ダメエ！気持ちよすぎて照月変になっちゃうよお♡」  
「こんな素敵なおチンポで貫かれたらどんな艦娘だっご主人様にメロメロになっちゃう♡」

はっ♡

あっ♡

おすちゅ♡  
おすちゅ♡

おすちゅ♡  
おすちゅ♡

「はっ♡はっ♡あうんっ♡ご主人様あ♡照月もうイッちゃいます！  
照月のおマンコにせーしくださー♡」



「あっ、あっ、ああああああああああああああああああああああんんっっっ♡♡♡♡」  
「…っ、はあっ♡はあっ♡しゅごい…照月の中に入りきらなくてせーしがあふれてきてる…♡」  
「もっとお…♡もっとお…♡ご主人様あ♡」  
「…ふえっ？ワンちゃんを犬小屋に戻さなくていいのかわですか？」

「あんっ♡せっかく盛り上がったてきたのだから…そうだよ」  
「提督♪一人で戻れますよね♪」  
もし、寄り道したり変なことをしようとしたら秋月姉に言いつけちゃうから！…いひひ♪」

ゴ  
ッ  
ビ  
ル  
ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ



「せっかく、折角ご主人様が抱いてくれるんですから、照月もちゃんと本当の姿にならないと♡」  
「んっ、ああんっ♡この快楽が全身を駆け巡る感じ♡」

「照月の体と心がご主人様で満たされてるみたいで、  
やっぱりこっちの姿のほうが照月は好きです♡」  
「いひひ♪準備完了です♡」

「あら、ようやく目を覚ましたの司令官？相変わらずダメダメな人ね♪」  
「えっ、この人？響に聞いてないの？この人が暁たちの新しい司令官、つまりご主人様よ♡」  
「司令官が悪いんだからね♪響の命令に逆らって暁たちを逃がそうとするから、  
ご主人様が直々に暁たちを教育してくれたのよ♪」

ド  
キ  
ン！

「そしてご主人様に逆らった司令官には

新しくご主人様の奴隷艦になった暁たちがもう一度現実を教えてあげることになったの♪」

「これから毎日、自分の大切な艦娘が自分以外に犯されるところ見ながら

自分の無力さを思い知りなさい♪」

「まずはご主人様が挿入しやすいようにストッキングを破るわね♪」  
「クスッ♪どうしたの司令官、そんなに暁のパンツを見つめて？」  
「やっぱり響が言ってた通り司令官は変態さんなのかしら♪」  
「これからこのパンツの中にある暁の『おまんこ』にご主人様の『おちんぼ』が入るのよ♪」

「羨ましい？司令官も入れてみたい？…クスッ♪ダメに決まってるじゃない♪」

「二人前のレディである暁に司令官のおちんぼは相應しくないわ♪  
相應しいのは男らしいおちんぼを持ったご主人様だけ♡」

「さあ、ご主人様♡司令官にもう暁が子供じゃないって証明してあげましょう♪」

ゴニョ

ゴニョ

「んっ！くっくっくっくっ！！」

「……どお！主人様のおちんぽをちゃんと受け入れることができたわ！」  
「主人様♡暁のおまんこはちゃんと気持ちいい？」

「クスツッ♪当り前じゃない！暁はもう大人のレディなんだからね！」  
「えっ！もう動くの!?ちよっと待って！挿入したばかりで敏感だから最初はゆっく……」

ズ  
ズ  
ズ

「あっああああんんんっっ!!! あんっっ あっはううっっ♡」  
「ダメエー! いきなりおちんぼスポスポ入れられると何も考えられなくなっちゃうう♡」

「あんっ♡ あっ♡ 息できななり!...でも気持ちいいわ♡ あっっ、ああんっ♡」  
「暁は立派なレディだから、主人様を気持ちよくしてあげないといけないの♡  
これじゃ私だけ先に...!」

ずちゅ  
ずちゅ  
ぐぐ  
ぐぐ  
ぽっ

「ふえっ？どうしたの？主人様？…あっああんっ！どうしておちんぽ抜いちゃうのよ」  
「ご主人様を差し置いて一人だけでイク気かですって？そっそんなわけないじゃない！」

ハ—♡♡

ハ—♡♡

おっぱい  
おまんこ

「そ、それよりご主人様♡」

「司令官に暁が立派なレディになった姿を見せたいのだけねどいらいかしら？」

「えへへ♪ありがとうご主人様♡」



「司令官は暁たちをまだ子供だと思っていたみたいだけれどもう暁たちは立派な大人の女になったの♡」

「最初は苦くて飲めなかったせーしを飲めるようになったり♡  
暁のおまんこが壊れるまでせっくすをして、赤ちゃんができるくらい中に出されたり♡」

「子供扱いする司令官の元では知らなかった

大人の女性の楽しみ方をいっぱい教えてもらったわ♡」

「よく見てね司令官♡これが暁がご主人様に教育してもらって立派なレディになった姿よ♡」

「クスツツどつかしら司令官？とつてもスケベで立派なレディになったでしょ」

「最初はおっぱい丸見えなこの服も少し恥ずかしかったけれど」

「主人様に喜んでもらうとどつても幸せな気分になってくるのよ♡」

くすくす  
マ・女はう・ら

「いっぱい探んでもらったから少しおっぱいも大きくなったし

おまんこなんて少し動くだけで服が食い込んでくるから

気持ちよくてお汁がいっぱい垂れてくるし♡」

「主人様あ♡もう我慢できないの！いつもみたいに暁が気絶するまでおまんこしてえ♡」

「ああああああんっ♡♡さっきより濡れてるからスムーズにおちんぼが挿入ってきたわぁ♡」  
「ああんっ♡男の人のために最高に気持ちよくなってもらうのはレディとして当り前じゃない♡」

ズルズルズルズル

「ああんっ♡」

「ああんっ♡」

「暁のおまんこもお口もおっぱいも、全部♡主人様を気持ちよくする道具なんだから♡」

「♡主人様♡早く突いてえ♡暁もいっぱい締め付けて気持ちよくするから♡」

「あうんっ♡あっ♡あうっ♡気持ちいい♡

「暁のおまんこをゴリゴリ突いてきて、またおまんこ広がっちゃう♡はあんっ♡」

「最初は入り口に挿入ただけでも痛かったけれど  
今では半分くらい余裕で入れてもらえるようになったわ♡ああんっ♡」

「あっ、あっ♡ダメえ！もうこのおちんぼ無しの毎日なんて考えられない♡

♡主人様あ、好き♡だっ♡い好き♡♡」

「司令官、ちゃんと見ててね今日は徹夜でせっくすするから♡目をそらしたら覚悟しなめら」

「んっ、あんっ、やあんっ♡あっ、ああんっ♡あっ、あっ、はうっ♡やっ、んうっ、あうんっ♡♡♡」

ずちゅ  
ずちゅ

ぐっ  
ぐっ

ぽっ



5時間後

「はあっ♡はあっ♡はあっ♡…えへ♡主人様のせーしでお腹いっぱい♡  
まるで赤ちゃんができたみたいだね♡」  
「司令官はほんをいっつと絶対でいっつ、いっつらでいっつ」

ハッ♡♡♡

トク…♡

ほっ…♡

ハッ♡♡♡

おっ…♡

フッ…♡

「ちゃんと自分の立場を理解できたかしら司令官？男としても司令官としてもあなたは0点」  
「今日はもう自分の部屋に帰っていいわよ、明日は雷と電の番だから楽しみにしてね♡」  
「じゃあ主人様♡暁たちは一緒にシャワーを浴びて一緒に寝ましょ♡バイバイ司令官♡」

「またこんな所でするんですか?」「  
いいえ、文句なんてありません!ですからお願いです、いいいっほ  
提督さんには内緒にしててくださいね!」

ふふふ

花嫁

「...ほら...さうぞ、由良のお、おマントをい自由にお使ってください!...」  
「ほら...さうの鏡、手をうらいてお尻を回せればいいです、ね...わかりました!...」

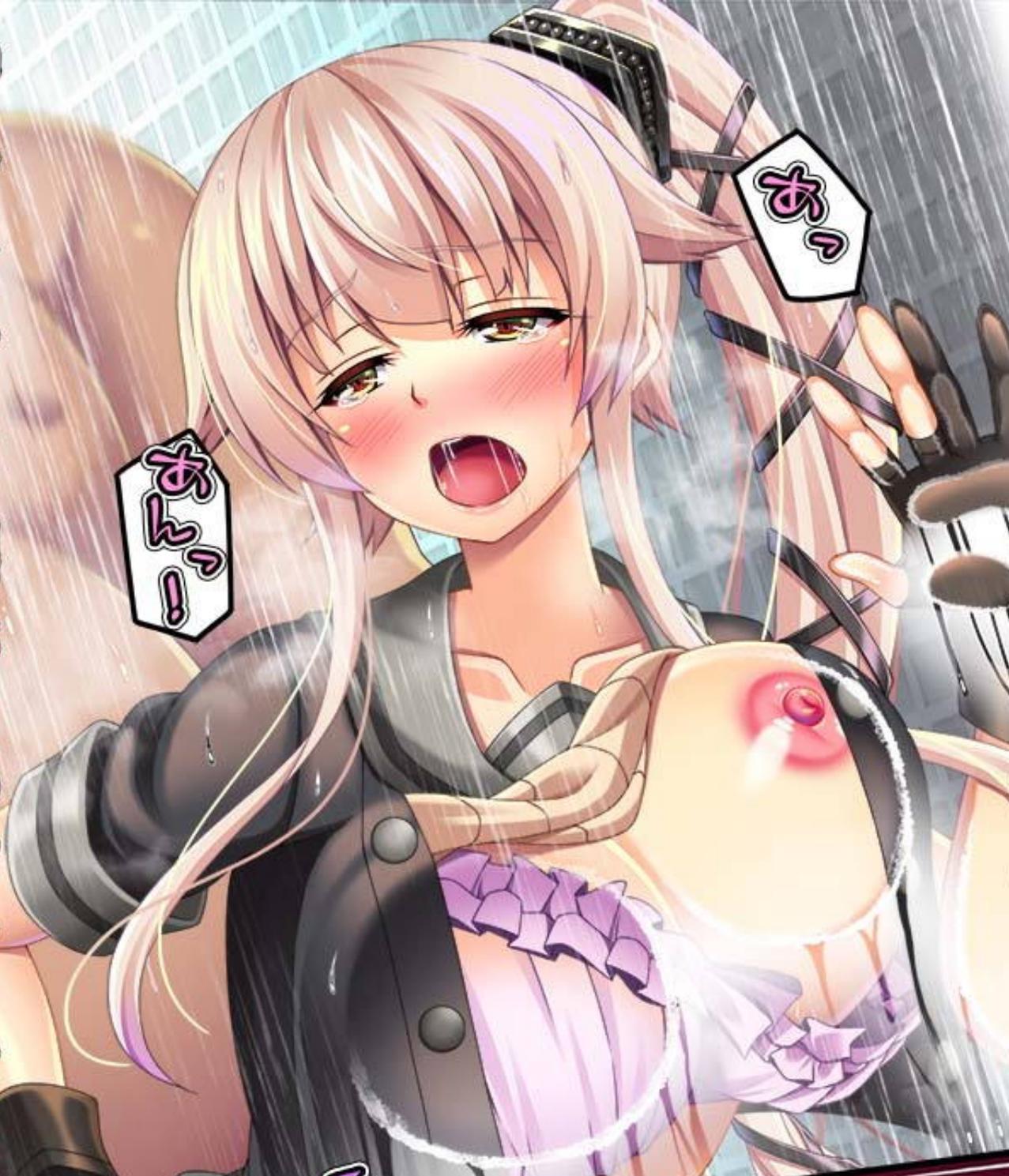
「これでいいです...えっ! あっ! んああああああんっ!」  
「いきなり入れないでください! あんっ! やっぱり大きすぎてキツイ! です!」

「えっ!」あの男は女も満足させられないへタレ粗チン提督! そんなことないです!  
「提督さんはあなたみたいな女の子を性処理の道具にしか思ってない人とは違います!  
それに提督さんはきつとあなたなんかより大きいはずです!...見たことはありませんけど!」

ズウウウウ...



「あ、ああんっ！きゅっ、急に動かないでください…あんっ、あっ、はうっ！」  
「あっ、あっ、んうっ！ダメ！そんなに激しく腰打ち付けしないでください！あっ、ああんっ！」



「ダメエ…コレされるといつも頭が真っ白になって何も考えられなくなる…ああんっ！」  
「あっ、あっ♡考えちゃいけないのに気持ちいいのが止まらない…はあんっ♡」

ああんっ  
ああんっ  
ああんっ

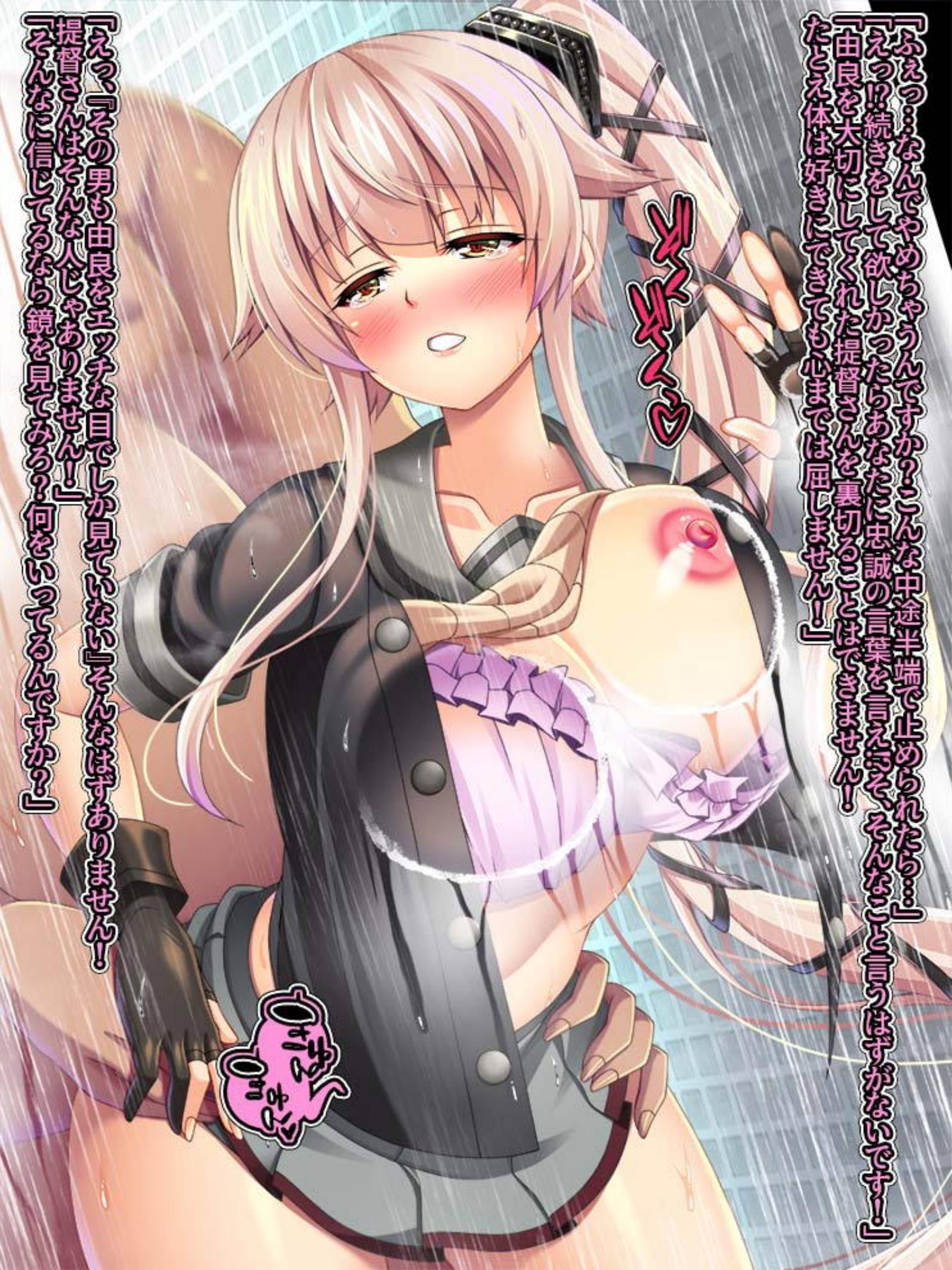


「ふえっ…なんでやめちゃうんですか？こんな中途半端で止められたら…」  
「えっ!? 続きをして欲しかったらあなたに忠誠の言葉を言えど、そんなこと言うはずがならぬぞ！」  
「由良を大切にしてくれた提督さんを裏切ることはできません！」  
「たとえ体は好きにできても心までは屈しません！」

ドクドク♡

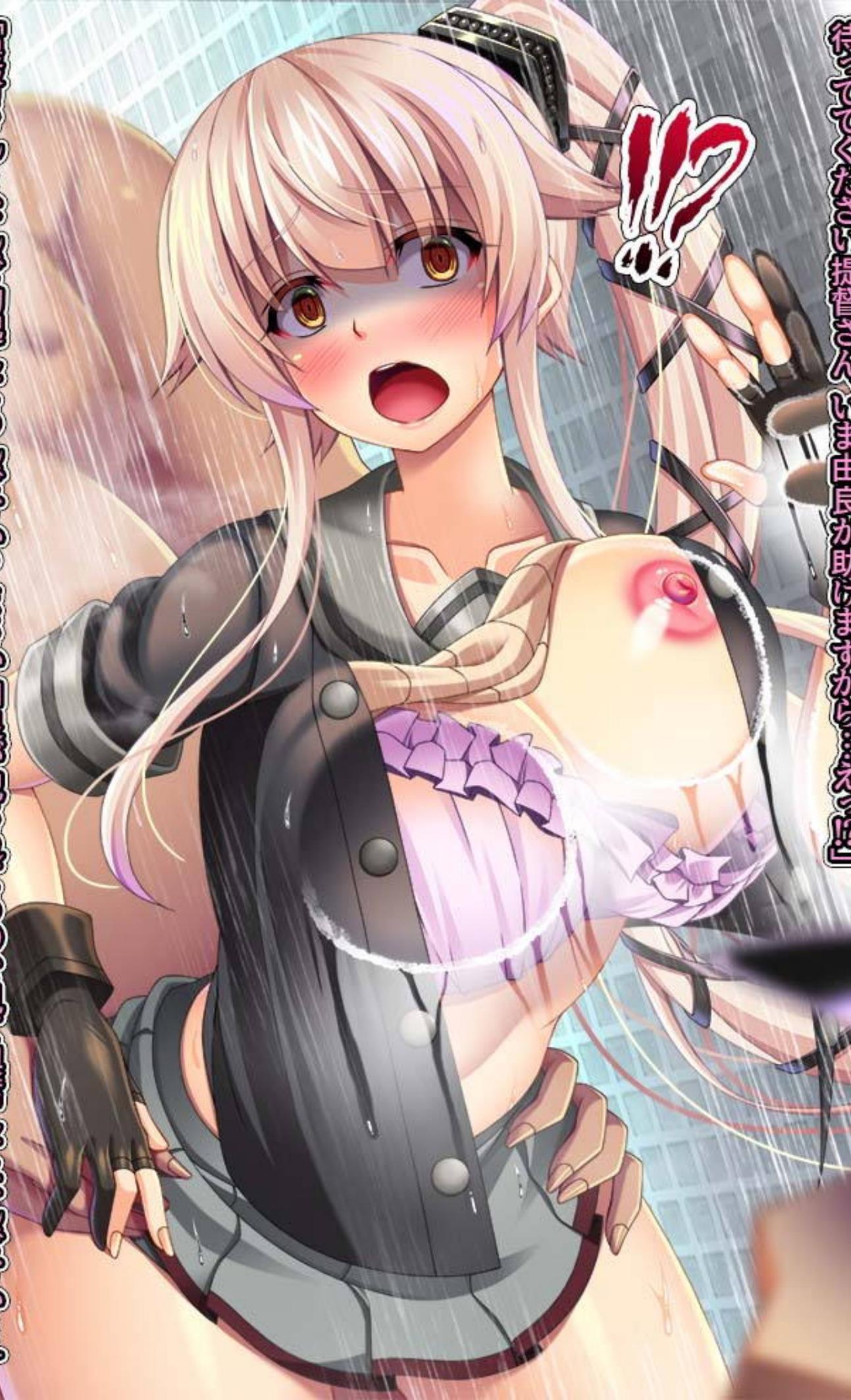
おしおし

「えっ、その男も由良をエッチな目でしか見ていたら」「そんなはずありません！  
提督さんはそんな人じゃありません！」  
「そんなに信じてるなら鏡を見てみる？何をらってるんですか？」



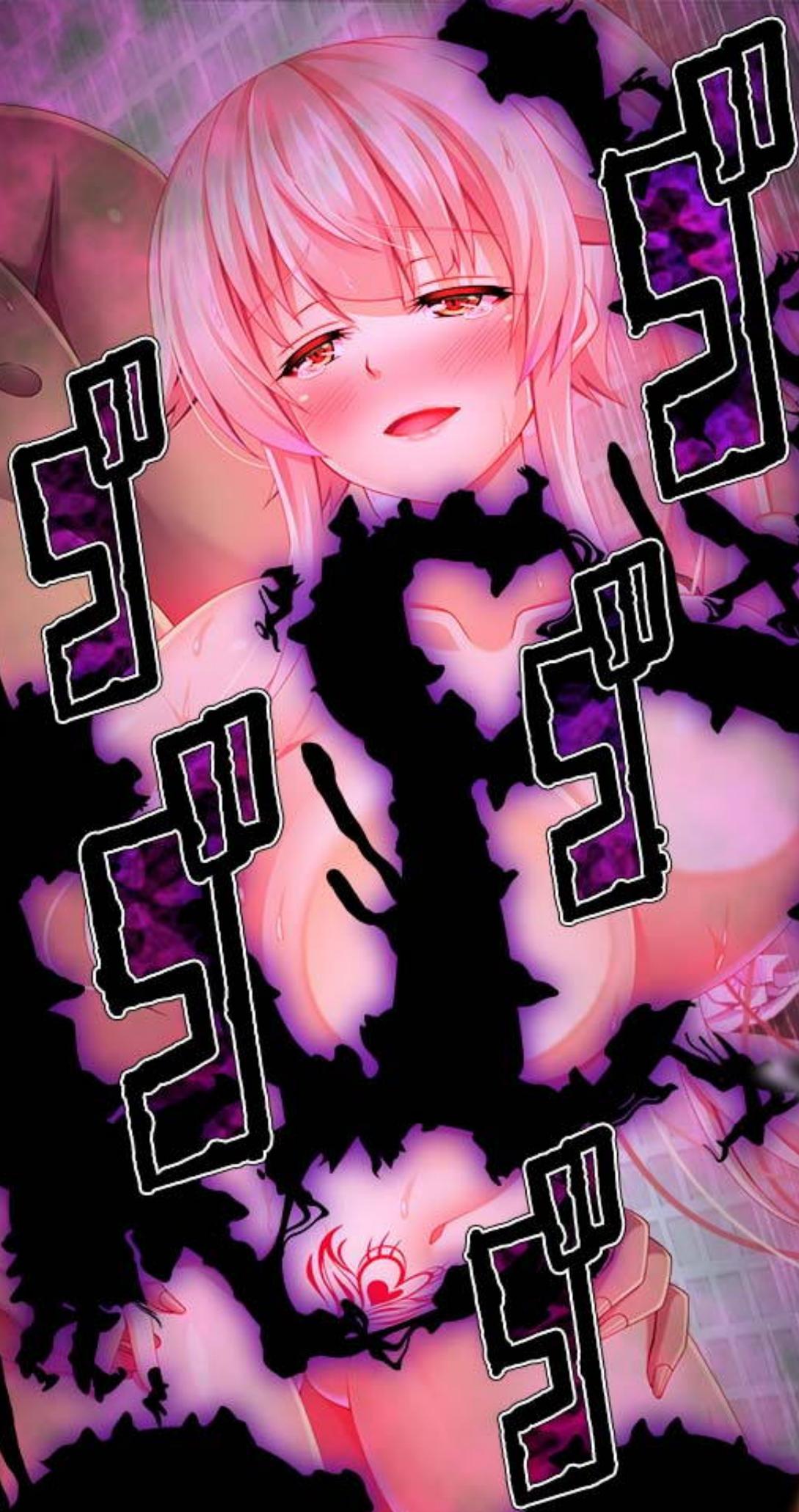
「えっ!? 鏡が真っ黒に…で、提督さん…なんでどうしてここにいらっしゃるんですか!」  
「あなた、約束を破ったのね! 提督さんには手を出さないって言ったのに!」  
「待っててください! 提督さん、いま由良が助けますから…えっ!?」

「提督さん…なんで勃起してるんですか? まさか由良が犯されてるのを見て興奮してたんですか…!」  
「そんな…由良は提督のために頑張ってたのに…提督さんも由良をそんな目で見てたんですか…!」



「もういいです…提督さんもこの人も同じなら由良はより気持ちよくしてくれるおチンポの持ち主に忠誠を誓います…」  
「ごめんなさい提督さん…でもその小さいおチンポじゃもう由良を気持ちよくすることはできないと思いますから」

「由良はもう後戻りができないくらいエッチな体に改装されて、このおチンポがないとダメなんです」  
「この人と出会った時から、由良の運命はもう決まっていたんですね！」



「んっ♡これが…新しく生まれ変わった由良?」  
「すごい!体中から力が湧いてきておマンコもさっきと比べ物にならないくらい気持ちいい♡」  
「こんな素敵な改装をしてくれるなんて、あなた…いえ、ご主人様♡ありがとうございます♡」  
「提督さん、どうですか生まれ変わった由良は?とっても素敵になったよね、ね♡」

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

「由良は素敵な改装をしてくれたご主人様と  
由良を気持ちよくしてくれるおチンポ様に絶対の忠誠を誓います♡」  
「どうぞ、由良の体をお好きなように使ってくださいね♡」

「あはああんっ♡ああんっ♡あっ♡あっ♡はうっ♡すっ♡いっ♡すっ♡主人様♡おまんこ気持ちいいです♡」  
「何度もご主人様に犯されてるうちに由良の体は  
いつの間にかご主人様専用の体になっちゃったんですね♡あはああんっ♡」  
「あっ♡ソコいいです♡子宮の入り口回シユボシユボされるの気持ちいいです♡あっ、ああん♡」

あんっ!

あっ

「こんな深いところ提督さんの粗チンじゃ絶対に届かないです。ね♡はあんっ♡」  
「今までこんな粗チン提督さんのために頑張ってたのがバカみたいですよ♡  
もっと早く自分に素直になってればよかった♡」

あ  
あ  
あ  
あ  
あ

「ふえ？どうしましたご主人様？…えっ、あつはああんんんっっっ♡♡♡」  
「あんっ♡すっ♡いい！腰さらに激しくなりました♡ああんっ♡こんな激しいの知らない♡」  
「ダメエっ♡頭真っ白になって気持ちよさと幸せだけで由良が一杯になっちゃっ♡はあんっ♡」

「しゅきい♡乱暴にされるのしゅきです♡」  
「ご主人様もつと由良を道具みたいに乱暴に使ってください♡」  
「あつ、あつ♡ダメダメえ！もつと気持ちいいことしたいのに由良もうフックちゃらさうです♡」  
「ご主人様も由良の膣内に一杯せーしてください♡一緒に♡ね♡ねっ♡」

ズルズルズルズル

ズルズルズルズル

あつ♡

あつ♡

あつ♡

あつ♡

あつ♡



「あっはあああああああああああああああああああ♡♡♡♡♡はあっ♡♡はあっ♡♡  
…うふふ♡由良のお腹…あちゅいです♡ヤケドしちゃいそう♡」  
「あっ！ご主人様のおチンポ♡大きいままで由良の膣内でピクピクしています♡かわいらし♡」  
「もう一度しますか？…はい♡次は湯船でしましよ♡」  
「そのあとは由良の体を使ってご主人様を洗ってあげますね♡」

「提督さん♡もうそんな人どうでもいいですから♡それより早く続きをしましよ♡ご主人様♡  
いつまでも覗いてないで早く消えてくださいね♡バイバイ提督さん♡」

「ピクピクピク」  
「びしょびしょ」  
「んんん」  
「んんん」



「失礼しまーす！新しくきた娘達の改装データと改装用の新型を持ってきました!!」  
「書類は後でいい？先に私で新型のテストをするんですか?」  
「それは構いませんけど、ここでしてもいいんですか?」  
「多分汚れちゃいますよ…はい、わかりました。では、早速試してみます!!」

「つと…すみません、ちよつと手伝わってやらせてもらいますか?」  
「人だともやうにうらやうに」





「きゃっ！……もお、相変わらず乱暴ですね♪  
わびわびと破らなくても命令があれば脱いだのじ♡」  
「本当にストッキングを破くの好きですよね♡  
まあ、そういう所も好きですよ♡」

「えーと、対象の艦娘の準備ができたら次は…はい！  
そのスイッチを押してください！」  
「そうしたら、センサーが自動的に艦娘を感知して改装にかかります」



「んっ…あんっ♡こっやっつて最初は優しく色んな所を優しく愛撫していきます♡」  
「おっぱいやおへそ、首筋や背筋、おまんこにお尻♡艦娘によって性感帯が違いますから、そこを探り出します」  
「そして見つけ出したら、ソコを重点的に愛撫していきます♡」  
「ちなみに私は背筋が弱いです…ふふっ、知ってますよね♡」

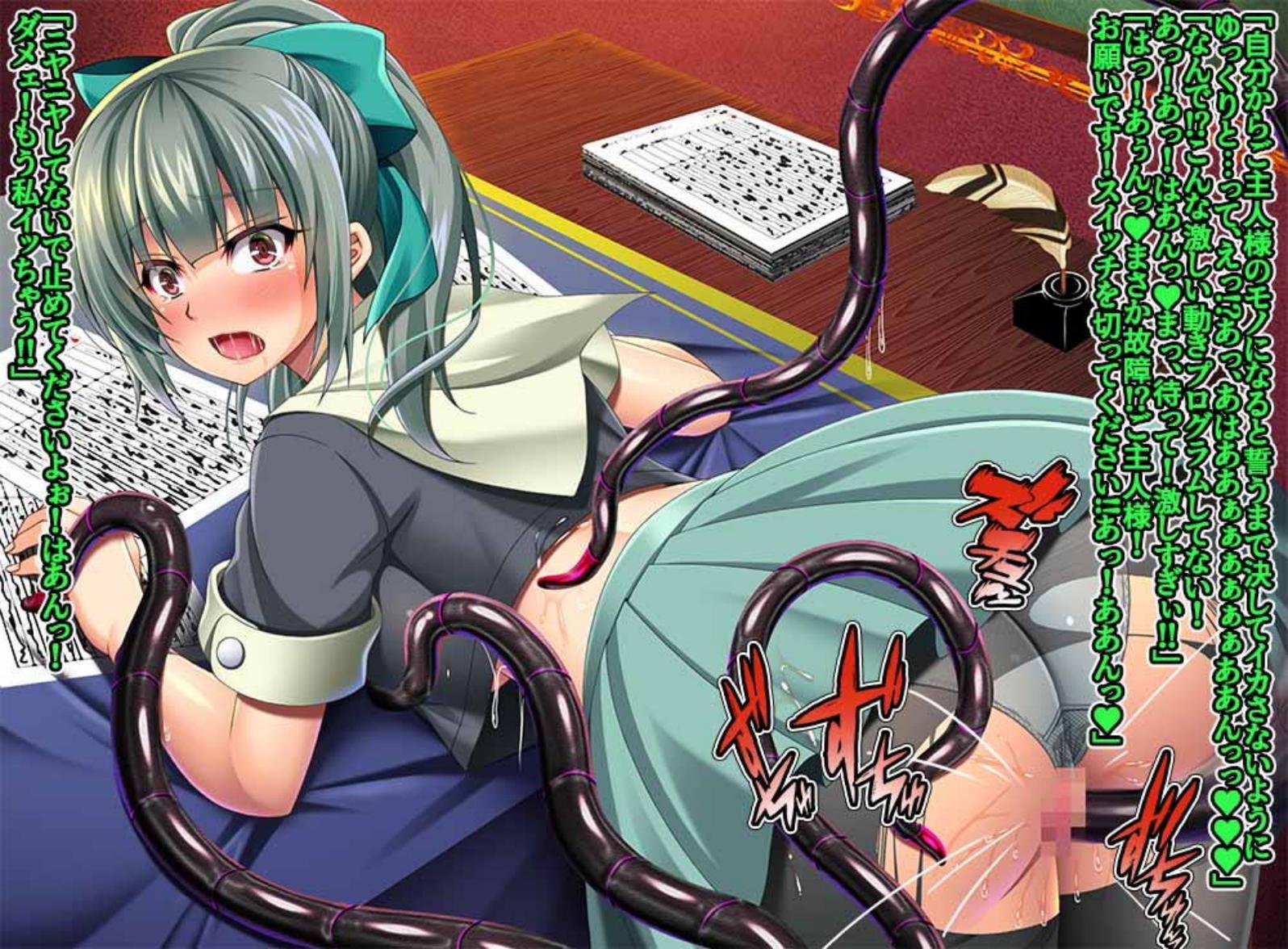
#イイ!

♡

#イイ

♡

「ある程度艦娘の好みがわかったら媚薬入りのローションを性感帯やおまんこに塗りつけます」  
「そしてそれが終わったらいいよ挿入です♡」



「ニヤニヤしないで止めてくださいよおーはあんっ!  
ダメエーもう私イッチちゃう!!」

「自分から主人様のモノになると誓うまで決してイカさないように  
ゆっくりと…つてえっ…あっ、あはああああああんっ♡♡♡」  
「なんで!? こんな激しい動き? ログラムしてない!  
あっ! あっ! はあんっ♡まっ、待って! 激しすぎ!!」  
「はっ! あうんっ♡まさか故障!? 主人様!  
お願いですースイッチを切ってください! あっ! ああんっ♡」

ズキ

ズキ  
ズキ

ズキ





「私を機械でイカせたとお詫いす、今日はおつかいします！とトトイってんたわん！♡おちかた♡」  
「主人様♡」

「もぉ！今日のお仕事は終わりです！書類は明日読んでください！」



「ふふっ♡やっぱりこっちの姿のほうが解放感がありますね♡」  
「あの姿のほうがみんな簡単に騙されてくれるので  
改装させてくれるから便利なんですけどね♡」

「それより♡主人様め♡早くおチンポください♡♡  
ほら、私のおマンコ、トロトロで食べごろですよ♡♡」  
「私の子宮めがけていっばい♡主人様の精子を撃ち込んでください♡♡」



「んああああああああああああんっ♡♡キタキタア！  
主人様のおチンポ入ってきたあ♡」

「突きさされるたびに全身を言く様なこの快感♡  
機械や他の男では絶対に味わえないわあ♡♡」

「あっ♡あっ♡ああんっ♡♡イイ！気持ちいい♡あっ！そこイイです♡  
腔内グリグリ好き♡♡」

ぬる...

「このおチンポもらえるなら昔の仲間なんていくらでもご主人様の奴隷に  
改造しちゃいます♡」  
「ご主人様も気持ちいいですか？...って何持ってるの!?...まさかー」

「ひああああああああんっ♡ダメェ♡背筋と一緒に突かないでえ  
頭おかしくなっちゃう♡」  
「あっ♡はあっ♡すっ♡いー♡コレすっ♡い♡あっ♡あっ♡  
こんなのされたり女の子は絶対に逆りえなくなっちゃう♡」  
「肌が触れてないところまで空気に触れるだけで感じてしまった♡  
全身が性感帯になったみたい♡」

＃イヤ！！

アッ

ムッ

ゴキョウ

ヌキョウ

ヌキョウ

ヌキョウ

ヌキョウ

ヌキョウ

＃イヤ

「もうダメー！私またイツちゃう！！私の腹内にご主人様のせーしください♡  
夕張の子宮をご主人様ので真っ白に改装してください♡」







「……」  
「朝潮「何って、おチンポですよ、ペニバンって言うらしいです」  
「主人様が露を舐めるためにわざわざ明石さんに作らせたんだそうです  
今からこれで露を徹底的に犯していただきますね」



「朝潮「あんた何を言ってるかわかってるの！  
それに私があんたの言うことを聞く条件に挿入はしないって約束もしてたわよね」  
朝潮「うふうふそれは、主人様のおチンポは挿入しないって約束でしたよね？  
それに私も愛撫ばかりで飽きてしまいましたしね」  
「この卑怯者！ やっぱりもうあんたは私を知ってる朝潮じゃなくなったのね！」  
朝潮「おバカですわ露は。最初からそう言ってたじゃないですか」  
朝潮はもう主人様の忠実な奴隷になったんですって♡」

ガシッ

ズズズ







朝潮「ほり、霞の心の奥底がご主人様の精液を求めてそれに  
相応しい姿に変わるうとしてます♡」

霞「えっ！いやっ、なにこれ！体中に何かが這いずり回って私が変えられていく？！」  
「やめて！頭の中をイジらないで！私の大切なものを消さないで！」  
朝潮「心配しないでください霞！私達にはご主人様がいてくれます♡  
あんなクズ司令官なんて早く死ねてしまえませう♡」  
霞「ダメ…もう何も考えられない…！めん…司令官…！」



「朝潮」改装完了ですわね。どうですか。真新しく生まれ変わった感想は？」

「……クスリ悪くはない……いいえ違う……最高の気分ね！」  
「なんで私は今まであんなクソ司令官のために意地なんか張ってたのかしら？  
「バツカみたい！」  
「私にとって大切なのは主人様の役に立って、褒美をもらう事！  
「それより大切なものなんてないわ！」  
「朝潮、偉いですよ。早く早速主人様に報告しに行きたいんですが  
「今こそ主人様は他の娘を相手にしてのでもう少し私と遊んでほしいですよ♡」





「あはあああああああああああああああんっ♡朝潮のおチンポがまた入ってきたああ♡」  
朝潮「んんんん♡雷のおマンコはっ♡きよもヌルヌルで気持ちいいです♡」

あん♡

あ♡

「朝潮のおチンポはっ♡きよの形がはっ♡きよ感じられて気持ちいい♡」  
ねえ早く動いてよ♡」  
朝潮「うふふっ♡雷もすっかりメスの顔はっ♡きよも気持ちいい♡」  
慌てなくてもおちんちん動いておちんちんが気持ちいい♡」

ズイイイ







「パパ♥言われたとおり提督を捕まえた、あたし偉い？」  
「えへへ〜♥パパの抱っこ好き♥」  
「え…？大好きだった提督は気にならないの…？」

ポク

「もうパパでも怒るよ…あたしが大好きなパパはパパだけだよ♥」  
「あんな人はパパのフリしてた偽物だもん…あたし、あの人嫌い…！」  
「ねえパパ？そんな事よりあたし、パパのために頑張った…ご褒美頂戴♥」





「パパ…あたしパパとのキスで興奮してきちゃった…♡パパのおチンポ頂戴…♡」

「んっ♡チュッ…チュッ…レロ、パパのキス好き…♡チュ…チュッ♡」  
「パパ♡ペロ出して…♡んっ、んちゅ…ちゅぱ…♡れえろ…れろれろ、レロッ…♡」  
「ぶはち…パパのペロ、あったかくて美味しい…♡」  
「ちゅ…ちゅっ、ちゅぱっ…ちゅ…ちゅ…んちゅ♡」

「あっ、んんっ！ああんっ♡パパのおチンポきたあ…♡大きくて暖かくて気持ちいい…♡」  
「パパの温もりを体の中から感じられて嬉しい…♡」

「ねえパパ？あたしのおマンコは気持ちいい…？えへへっ嬉しい…♡」  
「待っててねパパ♡あたし頑張って動くから、一緒に気持ちよくなるわ♡」

ずんずん♡

んん♡



「あんっ…ああんっ♡あっ、あっ…やあんっ♡  
パパのおチンポ気持ちいい♡ああんっ…あっ♡」  
「はあ…はあ…お腹の奥、コツコツ突かれるの好きら…♡あっ、はあんっ♡」

あん♡

あん♡

あん♡

あん♡

あん♡

「パパあ…キスして…んっ、ちゅっ、ちゅっ…これこれ…♡んっ、んあっ♡」  
「ダメ…気持ちよすぎて、あたしイッちゃう！イクッ！イクウウッッッ！」



「気にしなくていい……？ありがとうございます……パパ優しい♡」  
「……うん、今度はちゃんとイカせれるように頑張るね……♡」

「んやあああああああああ♡♡♡……はあっ……はあっ」  
「ぐすっ……ごめんねパパ……パパがまだイッてないのにあたしだけイッちゃった……」

ぎゅっ♡

まじゅっ♡



「パパにもっと興奮してもらえるように、パパの好きな格好になってあげるね♡」  
「あたしもこっちの方が好き…♡こっちの方がパパのモノって気がして…♡」

「この格好も、この格好にしてくれたパパも大好き…♡」



「…どうパパ、興奮するの？…えへへ、やった…♡」  
「最初はなれなかつたけど、今はこの体にぴったり吸い付いてくる服も  
パパに抱きしめられてるみたいで好き…♡」  
「提督もね、捕まえる時にあたしのおっぱいとかおマンコをジロジロ見たの…  
気持ち悪いよね…」

「いの格好はパパの為なの…」  
「あたしのおっぱいもおマンコも好きに見て触っていらのはパパだけ…♡」  
「パパ…もっともっと、あたしと気持ちよくなる…♡」

パパ  
気持ちよくなる

あ

「また、すぐにイツちやわなないようにゆっくり動くね♥」  
「んっ…んっ…♥あっ、んんっ…♥これ凄い…」  
「ゆっくり動くとパパのおチンポの形がちゃんとわかる…♥」

「それにあたしのおマンコの中を優しく引っ掻いて  
少しくすぐったいけど気持ちいい…♥」  
「あっ…ああんっ♥パパはどう？…もつと刺激が強い方がいい？  
…わかった、じゃあまた激しくするね…♥」

おまんこ

おまんこ



「はあっ…はあっ…、暖かい…♥パパのせーし  
あたしの赤ちゃんを作る部屋にいっぱい入ってきてる…♥」  
「パパ…このまま赤ちゃん作ろう…あたし、パパのママになりたい…♥」

「赤ちゃんが大きくなったら、あたしと一緒にパパに…♥  
「大丈夫…♥練習台は手に入ったから、きつとパパを満足させられるよ…♥」



「おい貴様!いつまで余をこのような所に閉じ込めておくつもりだ!」  
「くそ…」のよらなdisgrace(屈辱)…Admiralに合わせる顔がない…」

キッ

「さっさと余を沈めたらどうだ!それともまだ何か余に用でもあるのか!」  
「なんだそれは?何を持っている…深海棲艦共が付けていたモノに似ているが…」

「な、なんだは何をするー！shitーこれを外せー！」  
「ah…なんだこれは…余の記憶が消されてく…!?!」  
「おめいっせ…Admiralのmemories(畏ら丑)を消えなさいっせ…!」

ゴ  
ゴ  
ゴ

『……………』

「Here...who are you...(うん)は...貴様は誰だ...」  
「what?貴様が余のMy lordだと?何を言っている  
余がMy Admiralだ...Admiralとは誰だ...?」  
「sorry My lord?やらが...やらだったな  
余がMy lord(sex slave(メス奴隷)だったな...♡)」

ん...?

「どうか先ほどの無礼を許してほしい、許してもらえらるならなんでもしよう」  
「忠誠のキスをすればいいのか?わかった、どこにすればいい?」



「そ、そいにするのか!?...ら、らと、My lordがそれを望むなら、余はなんでもしようー!」  
「余、NelsonはMy lordに忠誠を捧げる  
My lordの敵をなぞ倒し、My lordが望むなら余の体を捧げる...とをいいに誓う」  
「チュッ...これでいいのか?...そのまますれを舐めればいいんだな  
わかつたちゅっ、ちゅぱっ...ちゅ、ちゅ...」  
「んっ、んちゅ...ちゅぱ...れえろ...れろれろ、れろっ...れろ...れろれろ...れえろ  
れろり...へろへろ...へちや...へちや...」

「あははは  
あははは  
あははは」

「あはは  
あはは  
あはは」

「My lordは花をらら...  
くろくろ...くろくろ...くろくろ...くろくろ...くろくろ...くろくろ...くろくろ...」





「これは…凄いな！余の体の中からどんどん力が湧いてくるのが感じられるぞ！」  
「それにwomb(子宮)のあたりが熱い…♡  
これが本当にMy lordのモノになるといふ感覚なのだな…brilliant♡(素晴らしい)」

「何か大切なモノを忘れていている気がするが、そんなものが些細なことと思えてくる…♡」

「……どうだMy lord? 新しい力を手に入れた余は?  
……それが、My lordに喜んでもらえて余も嬉しいぞ♥」  
「それじゃ……だな、まだMy lordのおチンポをもらえないだらうから?」

チンポ

「そのまから余のinstinct(本能)がMy lordのセーシを欲して止まぬのだー!」

「うむー先ほどと同じく回で構わぬー!」

「余はMy lordの専断セーシをもらえるだけぢー…♥」







「みんなあー！比叡のオナニーショーに来てくれてありがとうございますー！」  
「今日も気合十分なのでいっぱいお金を差し出してくださいねー！」  
「つてあれ？そこの最前列の人…司令じゃないですか！」

がぼっ

「あっ失礼しました。元々指令でしたね。」

「お姉さま達をご主人様に取りられて引き籠ってるかと思っただらこんな所に来てたんですか？」

「まあ、お金さえ払ってくれたら私は構いませんけどね。」

「それではみなさんお待ちしました。今日も気合！入れて！行きます！」





「後ろの人もちゃんと見えてますか？このパンツの中に女の子の大事な部分が隠れてるんですよ♡」  
「ポールに私のおマンコを擦りつけて…んっ！ああんっ♡」  
「ひんやりした金属が私のクリトリスに擦れて…気持ちいい♡」



「やんっ♡私のおマンコ、お汁が止まらなくなっってパンツが透けてきちゃいました♡」  
「みんな息荒くしてすっごい見てる♡」  
「そんな熱い視線向けられたらそれだけで私イッちゃいそう！あんっ♡あっ…イックウツ♡」



「ひえ〜！こんなに沢山！それではその二列目のダンディなおじ様に決定です！」  
「それではおじ様！リクエストをどうぞ！」

バサッ

バサッ

バサッ

バサッ

「ほう…ほう…ほう…なるほど！おじ様もなかなかいい趣味をしておりますねー」  
「それでは『本当の比叡ちゃんによる、元司令罵倒オナニーショー』で決定でーす」

「みんなが喜ぶから最初はこの格好でいつもしてますが  
本当はいつもの姿の方が動きやすいし何倍も興奮できるから好きなんですよねー♥」



「さあ、見ててくださいね！ご主人様によってメスの本性剥き出しに改装された比叡の本当の姿♥  
「指令もちゃんと、その粗末なおチンポをおっ勃てて準備しておいてくださいね♥  
お客さんの要望ですから♥」

「ふう…どうですか？全身ピッチピチの衣装なのに乳首は丸見え  
おまんこからはメスのフェロモンがムンムン♥興奮しますか？」

「つて聞くまでもないですね♥みんなピンピンにおチンポ勃起て  
何人かはもうシヨリ始めちゃってますね♥」

「指令はどうですか…つてあれ？あまり興奮してませんね…えっ…それで勃起してたんですか？」

「ごめんなさい、みんなと比べてあまりにも小さいので勃起してないのかと思いましたよ」

「じゃあ、その情けないおチンポをシヨリながら比叡のオナニーをよーく見ててくださいいね♥」

4F

おまんこ

「クスクスッ♪そんな泣きそうな顔をしてどうしたんですか司令？

自分の艦娘を取られて悔しいなら見なければいいじゃないですか♪」

「まあ無理でしょうけどね、司令は元部下の痴態から目を離したくても離せない変態ですもんね♪」

「悔しかったらその粗末なおチンポで私達を取り返せばいいじゃないですか？

そんな度胸があれば…ですけど♪」

「ほらほら♪このおマンコに挿入してみたくないですか？

ギチギチにおチンポを締め付けてご主人様にも好評なんですよ♪」

「あははっ♪やっぱりそんな度胸はありませんか！

まあ私も指令の駄チンポを入れるくらいなら、ポールでオナニーしてる方がマシですけどね♡」



「じゃあ、情けない元司令には比叡からサービス♪激しく、情熱的に腰を振ってあげますから  
自分のおチンポを挿入してると思っでシコッててくださいね♥」

「あつ…あつ…はうんっ♥はあつ…はつ…あつ…あはあんっ♥気持ちいい♥  
おマンコからイヤらしい音がいつぱいなっちゃうてる♥」

シコッ  
シコッ  
シコッ  
シコッ

「このおマンコにおチンポ入れたらどんなに気持ちいいんでしょうね？想像してみてくださいね♪  
「あははっ♪必死な顔でおチンポシコッてる♪その情けない姿がお似合いですね、司令♥」  
「あつ、あはんっ♥私ももうイッちゃいます♥」  
提督のおチンポじゃなくて、ただの鉄の棒に私イカされちゃいます♥」





「はい、その三列目の太ったおじ様！見事落札です！ではステージに上がってくださいよ」  
「なんですか司令？まさか私を落札する気だったんですか？」

バザッ

バザッ

バザッ

バザッ

「クスクスっ」残念ですね、私のおマンコを味わえるのはご主人様かご主人様のために

お金を払ってくださるかたのみなんです」

「お金のない人はさっさと帰ってくださいね♡」

ただショーが終わった後の片づけをしてくれるなら最後まで見ていてもいいですよ♡」

「しばらくしたら金剛お姉さまも来ますし…どうしますか？し・れ・い♡」



「あつ、やつと起きたん提督？まったくお寝坊さんやねえ♪」  
「なんじゃ？体が動かん？そりゃそーじゃな♪」  
「うちが提督のお茶に薬を仕込んだんじゃからなあ♪」

がっ  
はっ

「なんでそがいな事をするのかつて？そりゃ、ご主人様の為に決まっとるじゃろ♪」  
「今のうちな、もう提督の艦娘だった浦風じゃないんよ、今はご主人様のメス奴隷艦娘じゃ♡」



ガキヤッ

「ご主人様、もう入って来てええよ♥提督、この人がうちのご主人様じゃ♥男前じゃろ♪」  
「実は提督を動けなくしたのはうちのご主人様をお願いを聞いてもらいたいからなんじゃよ♪」  
「この鎮守府の指揮権と全艦娘をご主人様に明け渡して欲しいんじゃ♪」  
「うふふ♪そらあ素直には聞いてくれんよねえ♪」  
「そいじゃうちのご主人様にご褒美をもらってる間に気が変わったらいつでも言つてええからね♪」

「ご主人様のご褒美おチンプ頂戴♥」

「あっはああああんっ♡♡ご主人様のおチンポ、ぶち大きい♡  
入れただけなのに、うち軽くイッてもうた♡」  
「このおチンポ入れた時の電流が走る感覚♡これメツチャ好きなんよ♡」

おほお♡

「あんっ♡おマンコのお肉も勝手におチンポに絡みついて…♡動いてないのにはり気持ちいい♡」  
「ええんよご主人様♡うちに気を使わんと好きなように動いて、うちにご主人様の精液頂戴♡」



「あんっ♡あんっ♡あっ…あっ♡やんっ、激しい♡ご主人様、ばりかつこええよ♡あっ…ああんっ♡」  
「ゴリゴリっでおまんこを激しく犯して♡うちもぶち気持ちええよ♡」  
「うふふっ♪で…いとく♪うちのおっぱいばかり見てどうしたん？」  
「ココもスポン越しにわかるくらい勃起して♪」

あん♡

おっ♡

びん

びん

たろ♡

たろ

「ご主人様に突かれるたびに暴れるうちのおっぱいに興奮したん？ふふっ、提督はスケベじゃねえ♪」  
「ええんよ、うちももうイキそうじゃし、ご主人様に犯されて絶頂するうちをいっぱい見て♡」



「うふふっ♪そんな強がり言ってもココはうちのセックスを見てピクピク反応してるけえ♪」  
「まっ、うちのおマンコがいらんなら別にええけど♪…どうするん♪」  
「次ご主人様がイッたらもううちらはこの部屋は出ていくから、もうおマンコは使えんし」

「うちも本気でご主人様をイカせにいくからがこれが最後のチャンスじゃよ♪」  
「それまでによく考えるんじゃね、ていどくく♥」



「どうじゃ、提督♪これがご主人様に変えられた新しいうちの姿じゃ♡」  
「この大きいおっぱいも、発情しきつたメスマンコも  
提督がみんなをご主人様に差し出すだけで使いたい放題なんじゃよ♡」  
「うちのおマンコが壊れて提督のおチンポが折れてしまうまで使いたい放題じゃ♡」

「ほらほら、早く答えんとまたご主人様にうちの体好き勝手にされてまうよ♡  
他の男に取られて悔しくないん♪」

ピル!



「んっはああああああんっ♡♡提督がグズグズしてるから  
またご主人様のおチンポがおマンコに入ってきたあ♡」  
「今うちのおマンコのお肉を絞めて、ご主人様のおチンポをギュッとしたりんじゃよ♡」

あん♡

おほお♡

「男にご奉仕することしか考えてないメスマンコ、提督も味わいたいじゃろ」  
「提督もうちのおマンコでぶち気持ちよくなりたいたいじゃろ」



「ああんっ! あっ♡ あっ♡ ほらご主人様がピストンを始めてもうた♡ あっ♡ あはんっ♡」  
「あんっ♡ おマンコ気持ちいい♡ 赤ちゃんの部屋の入り口ツッコツツ突かれるのぶち好きい♡」  
「提督も望めば今ご主人様が使ってるトロトロおマンコも  
提督の目の前で暴れまわってるおっぱいもいっぱい使えるんじゃないよ♡」

がっ♡

お♡

びん

びん

た

た

た

は♡

「あっ:はっ、やんっ♡ ご主人様のおチンポピクピクしてきたあ♡」  
「もうイキそうなんじゃねご主人様♡ うちももう:イクっ:イクイクイクっ♡」



「あつはああああああああああああんっ♡♡♡♡」  
「はあ…はあ…ご主人様のせいし…暖かあ…♡♡」  
「それでどうじゃ提督、答えは変わらん？……うふふっ♪」  
「これで今からこの鎮守府と提督の艦娘はご主人様のモノじゃね♡」  
「えっ、約束のセックス??何に言いよるのようちが言ったのは」  
「おマンコやおっぱいを好きにだけオナニーのおかずに使って…ええよ♡」って話じゃっ♪

「まさかうちが提督とセックスするって思ったん?何を勘違いしちゃったんじゃろうなあ」  
「バカな、ていどくっ♪」



はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

REC

「おっ、司令官！おはようございます♥」

「えっ、この状況ですか？そんなの見ればわかるじゃないですか♪」

「青葉は司令官とエッチなことをしたくて寝起きを襲いに来ちゃいました♪」

クイ♡

がばっ

「ふざけてなんかないですよ〜実は青葉、司令官の事を前から好きだったんです♥」

「だからいいですよね司令官♥女の子に恥をかかさなくてくださいいな♥」

「にじじっ、っ」口ではそう言ってもおチンポは正直ですね♡  
「ほら青葉のパンツをずらしておマンコにスプフウツと…♡」  
「んっ、あんっ♡司令官のおチンポが青葉のおマンコに食べられちゃいましたねっ」

ズルッ

REC

「どうですか？司令官とエッチしたくてエッチなよだれをたらした  
青葉のおマンコのお味は♡」  
「気持ちいい？それは恐縮です♡  
いいんですよ、青葉を司令官のオナホだと思って好きなように腰を振っても♡」

「あっ、あんっ♥あっあっ♥あっあっ♥いいです司令官♥  
もっとな青葉を壊す気で腰を振って下さい♥あっ、やあんっ♥」  
「ぐちゅぐちゅエッチな音がしてヤラしいですね♥  
青葉は今司令官専用の肉オナホになっちゃってますね♥」

「そんな必死な顔して、童貞丸出しって感じですよ♥とっってもいい表情してます♥」  
「えっもう出ちゃいそうなんですか?」

「じゃあ『青葉、俺の子を孕め!』って言いながら射精してください♥」

「そう言うってくれるなら、特別に青葉のおマンコにナ・カ・ダ・シ♥してもらいますよ♥」

「にじじっ♪…司令官に無理やり孕まされちゃうーっ♪」

アッ♥  
アッ♥  
アッ♥

アッ♥  
アッ♥  
アッ♥  
アッ♥



「はあっ♡はあっ♡はどうでした司令官？青葉に中出し、気持ちよかったですか？」  
「それは何より♡青葉もまあまあ気持ちよかったですよ♡」  
「はっ、しまった！うっかり本音が…」

ちゅっ

ビュッ  
ビュッ

「あー…まあ撮りたい映像は撮れたからまあいいか」  
「にしっしっ♪何を言ってるって顔ですね司令官♪」  
「さーで問題です！あそこの壁に埋まってるのは何でしょうか？」  
「せいーかい！答えはカメラでした♪」  
「つまりこの行為はバッチリカメラに収められちゃったって事です♪」

「後は今の映像をちよこつと編集すれば司令官に無理やりエッチをするよう命令された可愛そうな青葉ちゃんの映像の完成です♪」

「なんでこんな事をするかって？そりゃれは〜は〜♥」

司令官には青葉のご主人様のために軍の情報を流して欲しいからです♥」

「司令官は上層部に顔が利きますからね♪」

「ご主人様の欲しい情報を随時青葉に教えて欲しいんですよ♪」

「もし嫌なら、さっきの映像を上層部とネットにバラまいて」

「一生パワハラレイプ魔として後ろ指をさされる人生を送ってもらいます♥」

「冗談？冗談なんか言うはずないじゃないですか♪その証拠に………」



「見てくださいいっ！これがご主人様に改装された青葉の新しい姿です♡」  
「青葉のお回も、おっぱいも、おまんこも、ご主人様のたくましいおチンポ様に  
女の喜びを教えてもらって身も心も捧げたんですよ♡」

「あっ、その目の前のことが信じられない絶望しきった顔…  
好きな表情です！今手元にカメラがないのが惜しいですね」  
「ほら、どうするんですか司令官？もし青葉の言うことを聞いてくれるならもれなく  
もう一回青葉とエッチなことができますよ」  
「それともレイプ魔として一生生きていきたいですか？  
……にじしっ！司令官はお利巧ですね」



「それじゃあご褒美に、さっきのお遊びセックスより気持ちいい  
青葉の本気セックスを味あわせてあげますよ」  
「んっ、んんっ♡どうですか？さっきより深いところまではいったでしょ」  
それにおマンコのお肉もニユルニユル動いて…」

ズ  
ズ  
ズ

「あんっ♡まるでおチンポをおねだりするみたいなのエッチな動き」

「これもご主人様に調教された成果ですよ♡」

「司令官も気持ちいいみたいですわ♡さっきよりもお顔がだらしなくなってますよ♡」

「でもまだまだ、こんなのは本気セックスの準備段階ですからね」

C

「んっ、んっ、あっ♥ああんっ!はっ、はっ♥♥どうですか?さっきよりも激しいピストン♥」  
「司令官のがむしやらに腰を振るのとは違って

おチンポの気持ちいい所を刺激してすぐに射精しちゃういそうですよね♥」  
「あんな、へたっぴなピストンじゃ女の子一人満足させられないですよ」  
だから自分の艦娘を他の男に寝取られちゃうんです♥」



「あれ、なんでバカにされたのにおチンポ硬くなっちゃってるんですか?」  
司令官って実は…Mなんですか?」  
「これはスクープですね!艦娘を束ねる司令官、実は罵倒されて喜ぶドM提督!」  
これはみんな引いちゃうでしょうね!」

「にししっ!否定してもおチンポは正直ですよ!イキたくてしょうがないんでしょう?」  
ほら、イケ!バカにされながらイツちゃえ!」

「んっああああああんっ♡♡♡…はあっはあっ♡  
さっきよりもたくさん射精できましたね♡おマンコからもあふれてきちやっています♡」  
「青葉も軽くイツちゃいました♡ほら、おマンコ肉がピクピク痙攣してるでしょ」



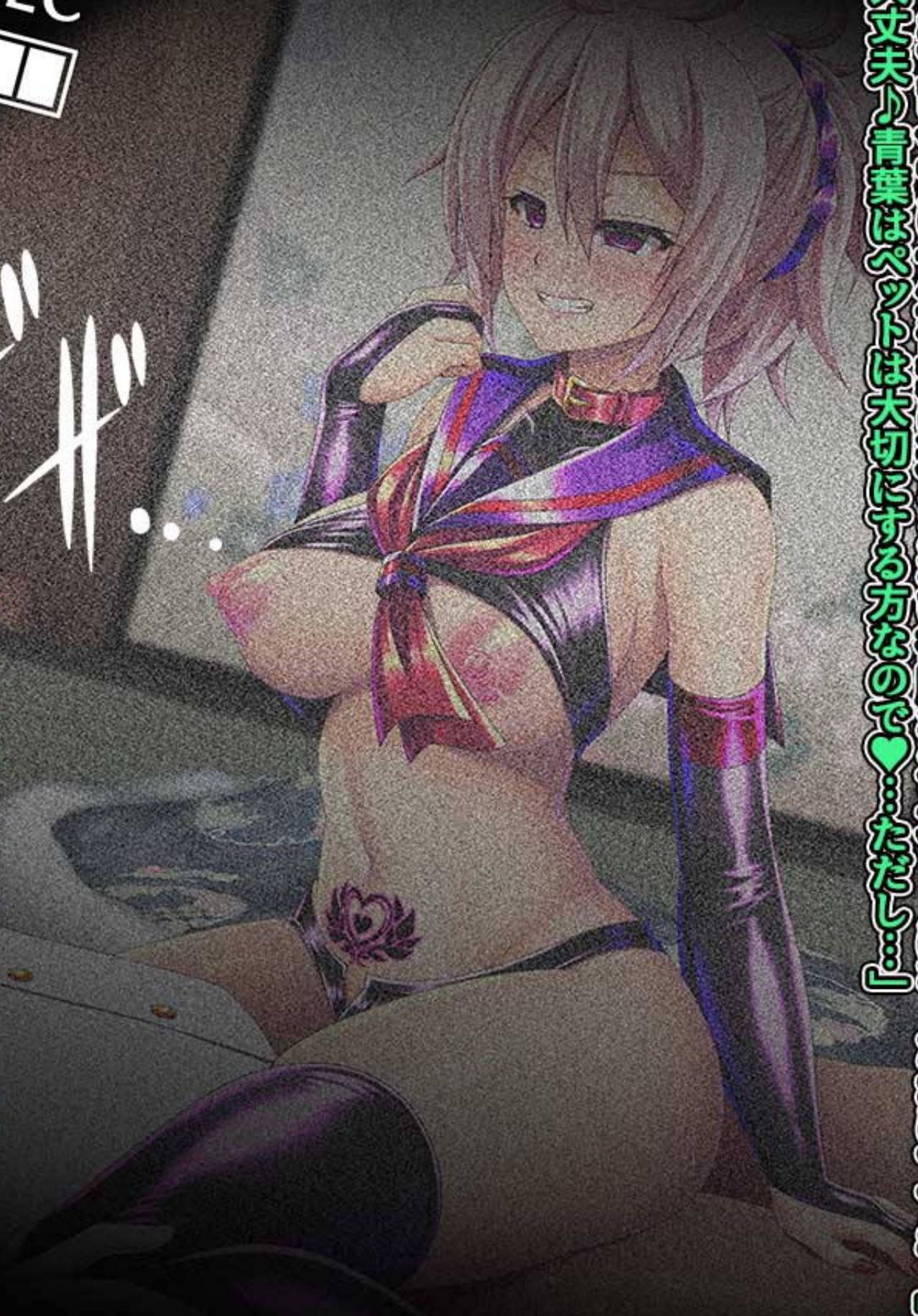
「なかなか司令官とのエッチも楽しかったですよ」  
「ご主人様が抱いてくれない間暇つぶしにらまたエッチしてあげましょうか？」  
「そうですね」  
「俺は青葉様の従順な奴隷です、どんなことでも青葉様に逆らいません」  
「って言えたら青葉のペットにしてあげます♡」  
「にじじっ♡いい子ですね司令官」



「これで司令官は一生青葉に逆らえない従順なオスペットになったわけですね」  
「大丈夫、青葉はペットは大切にされる方なので♡…ただし！」



「もし青葉に逆らったら…わかってますよね♡」  
「さあ、これから先青葉とご主人様のために  
大いに役にたってもらいますよ！…元、司令官♡」



「はあ…やだなあ…今日もパパの言いつけて提督を見張らなきゃいけないなんて…」  
「ねえ、さつきからどこ見てるの？ハアハア息が荒くて…気持ち悪い…」

「そっか…提督、自分の部下の艦娘をパパに取られていつも興奮してる変態だもんね…」  
「提督の艦娘だったあたしに見下ろされて興奮しちゃったんだ…」



「いつまでもハアハアされても気持ち悪いし…  
パパがお仕事終わって迎えに来てくれるまで遊んであげる…」

「ただし使うのはあたしの足だけだよ…直に提督に触れるのは嫌だもん…」  
「ほら、おチンポ出して…早くしないと気が変わって提督のタマタマを潰す遊びに変えちゃうよ…」



「……これ、完全に勃起してるの？パパのと比べて全然小さい……」  
「そっか……パパのおチンポが普通のひとくべて大きいんだ……パパやっぱりすごい♡」

「それに比べてこのチンポ……あたしの足でスリスリされてるだけなのに  
もうイキそうなくらいビクビクしてる……」  
「イキそうならイッてもいいよ……好き気にしたら……」



すっ

すっ



「んっ、んんうっ！…本当に出た…お口でもおマンコでもない、足の裏でイクなんて…気持ち悪い」  
「うわ…あたしの足ドロドロ…それに臭いも生臭い…」  
「…？なに満足そうな顔してるの？まだまだ終わりじゃないよ…」

「あたしは提督の精液を出し尽くして、気持ち悪い息づかいを止めたいだけなの…  
提督に気持ちよくなってもらうのが目的じゃないの」

「んっ」

「んっ！！」



「だから射精のよいんなんて与えてあげない…イッてもイッても射精させ続けて  
タマタマ空っぽにしてあげる」

「ほら…ほら…どう？休みなく射精させると苦しいでしょ  
パパに教えてもらった男の人の拷問のしかただよ」

すっ

すっ

「おチンポ壊れちゃいそう？そのまま壊れちゃえばあたしも楽だし、別にいいよ」  
「ほら…もっと激しくしてあげるから、そのままおチンポ壊しちゃお？」



「んっ…んっ…んっ…はあ、はあ、すごい！さっきよりも大きくビクビクしてるよ  
これ…楽しいかもよ」  
「おチンポだけじゃなくて全身ビクビクしてきた…  
ダメだよ提督…あんまり動くとタマタマ踏みつぶしちゃうよ？」

「そうそう…そうやって大人しくしてて、提督がビクビク悶えてると足動かしづらいし  
なにより…気持ち悪い…」  
「はあ…なんで気持ち悪いって言うたびにビクッて反応するの？救いようのない変態…」

すっ  
すっ

すっ



「うわあ…あたしに悪回言われながら射精してる…しかもさつきよりも量が多い…」  
「こんなドMな変態提督の事をパパだと思ってたなんて…本当に気持ち悪い…」  
「どうしたの…足を止めて欲しい？そんなこと言って…ドM提督はこうされたいんでしょ？」

「射精しても射精しても、休みなく足コキされて…おチンポさんおバカになっちゃうのがいいんだよね♪」

とちゅう

ドM  
提督

「ほらほら…動いちゃダメだよ？抵抗なんてしちゃうダメ  
射精したくなったら好きにだけ射精していいから」  
「もう射精することしか考えられないよね？いいんだよ我慢なんてしなくても」

「おチンポ壊れちゃったんだから仕方ないよね…でもドM提督はそれでも嬉しいよね」  
「ほら、イケ！…イッちゃえ！女の子に踏みつけられながら情けなくイッちゃえ！」

％  
％

％  
％



「んっはああんっ♡♡今までで一番射精したよ」  
「パパが言ってたドMの人は言葉で攻めながらすると喜ぶって本当だったんだよ」  
「よだれたらししながら、情けない顔をして…そんなにあたしの足コキ気持ちよかった？」

「そう…でもまだまだ終わらないよ」  
「言ったでしょ」提督のタマタマを空っぽにするまでやめない」って」  
「んっ？今のノック…だれだろ？」



んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ

「あつー！パパ♥お仕事終わったの！……これからあたしとセックスしたい？うん！もちろんいいよ♥」  
「あつでも、あたし遊んでたから汚れをお風呂で洗い流したいんだけどいいかな？」  
「……うん、パパも一緒に入る♥」  
「パパ♥今日はどんな事して欲しい？おっぱいでパイズリ？それともお尻でアナルセックス？」

い  
ぬ  
あ



「えつー！あたしの足で足コキされたい？  
うん……パパがして欲しいなら、愛情込めていっぱい足コキするね♥」  
「あつ、提督……ちゃんとこの部屋片づけしておいてね……明日海風姉と江風がこの部屋使うんだから」

「きゃっ♡どうしたんですかご主人様」  
照月「これからワンちゃんのお散歩に行こうかと思っただけですけど」  
「やんっ♡そんなに照月のお尻におチンポを押し付けられないでくださいよ」  
照月「も我慢できなくなっちゃうじゃないですか♡」  
「えっワンちゃんはいいのかって？それよりご主人様のおチンポの方が大切です♡  
ワンちゃんは後で散歩に連れて行けば大丈夫ですよ♡」

「そんな事よりご主人様♡  
早く照月のおマンコに嬉しいおチンポをください♡」





「んっはああああああああああああんっっ♥キタキタア！  
照月のおマンコ肉をかき分けておチンポ様が入ってきたああ♥」

「やっぱりご主人様のおチンポが二番気持ちいい♥」

「ワンちゃんのも試してみたけど、全然気持ちよくないんだもんよ」

「この女の子の意思を無視して無理やりお肉をかき分けて入ってきて  
男に屈服させるのが本物のおチンポだよねご主人様♥」

おんっ♥

「まだ動いてないのに照月の子宮、もうイッちゃいますよ♥  
このままだと変になっちゃいますよご主人様♥」

「あつ…あつ…ああんっ♡気持ちいい♡こりゅこりゅって  
照月の膈内を出たり入ったりして全身ソクソクしちゃいます♡」  
「はっ、はあんっ♡んっ、んっ、んあつ♡ばんっばんってヤラしい音がなって  
隣の部屋のワンちゃんにも聞こえますよ♡」  
「あんっ、あんっ♡ああんっ!…あつ、あつ♡もう照月我慢できません!  
イっちゃいますっ♡」

「♡主人様も照月の膈内にいっぱい♡  
照月を孕ませるくらいいっぱい射精していただきます♡」



「あ、はああああああああああああんっ♡♡♡…はあっ…はあっ♡」  
「お腹熱いですご主人様♡本当に赤ちゃんできちゃったかも、いひひっ」  
「どうでしたか？照月のおマンコおマンコ気持ちよかったですか？…それは良かったです♡」



「あっ…ご主人様のおチンポ、また照月のおマンコの中で大きくなってきましたよ♡」  
「ご主人様のおチンポが満足するまで、照月のおマンコをガンガン使ってください♡」



「はあっ...はあっ...どうして止めちゃうんですかご主人様あ?」  
「あっ、ごめんなさい! 奴隷が主人を差し置いてイクのはダメですよね!」  
イク時はご主人様も「結ばなきゃ」

...16

「ご主人様、このダメなメス奴隷の照月にお仕置きをしてください!!」  
誰が主人か照月の体に教え込んでください♡」





「えっ、どうしましたごしゅ……んっ、あああああああんっ！  
はっ激しすぎですご主人様っ」  
「えっその言葉が嘘じゃないか確かめてやる？  
あっ！ああんっ♡♡ダメェー！そんなにされたら  
またすぐにイッちゃう!!」  
「んんっ……はあ……ん……えっご  
ご主人様がイクまで我慢する  
……わかりました!!照月頑張ります!!」  
「ああんっ♡♡んっ♡♡んは……ああんっ♡  
ご主人様、おチンポビクビクしてきて……  
もうイクそうなんですか？あうんっ♡」

しゃぼ♡  
しゃぼ♡  
しゃぼ♡

100%  
100%

「我慢しないで射精してください!!  
照月もこれ以上我慢できません!!ダメェーイク、イクイクウー!!」







「えっ!ちゃんと言いつけを守ったご褒美に今夜はずっと照月の相手をしてくれるんですか!」  
「うそ!やったあ♥じゃあ、早速続きをしましょうよご主人様♥  
あつ、でも一回お風呂で体を流しながらイチヤイチヤするのもいいですね♥」  
「えっ!あつ!忘れてました!...でもせっかくなご主人様が構ってくれるから今夜のワンちゃんのお散歩はお休みにします♥」  
「というわけで、さつきからドアの隙間から覗いてるワンちゃん♪  
今日の散歩は中止だから頑張って一人でシコってね♪」

4回オ。

「さあ、行きましょうご主人様♥  
照月のおっぱいを使ってお背中流してあげますから...いひひっ♥」



「暁」や、やっぱり大きいわね。でも一人前のレディの暁達には余裕かしらね！  
「響」そうだねりじゃあご主人様これより響暁のご奉仕を開始するよ♥  
要望があったら遠慮なく言ってね♥」  
「暁」あ、響スルい！暁がそのセリフを言いたかったのに！むう」



「響」ふふっ♡じゃあお詫びに今日は暁に  
おチンプの一番美味しい所を譲ってあげるよ」  
「暁」本当？後で頂戴って言っても上げないだからね！」

おチンプ



「暁」はあむ…っ…れろれろ、んっ、んっ！んっふんっちゅ、んちゅ…  
ちゅっばちゅっばあ♡」

「響」スゴイな暁！この間よりも深く唾えられてるよ！  
それに顔もとってもヤラしい♡」  
「暁」べろべろべろっ、ひびきよふふいっと言わないれよ…  
…んちゅ、んじゅるるるっ！」

「暁」んちゅ、ちゅほっ！ちゅるるる、ちゅる、ちゅううういっ  
ちゅっづっ！ちゅるるる…っふはあ！」  
「響」もう響と変わるの？ご主人様がそういうならしょうがなけれど…  
「響」それじゃあ、次は私、響がご奉仕させてもらおうよ！♡」



ちゅほ ちゅほ

ちゅる

かっほ♡  
れろ べろ











二人「それじゃあ、いただきます〜す♡」  
「喉あむっ♡ちゅっば、ちゅっば、ちゅっば、んっ♡ジュルルルズツ♡…  
じゅるるるる、ちゅっばちゅっば♡」

「へろへろ、れろっ…れろろ、ちゅばばっ…じゅずっ、ジュルルルズツ♡  
じゅずっ♡じゅずっ♡♡」

「さっき出したセーシがまだ残ってて美味しい♡れろ〜えろ〜れれろ♡」  
「またおチンポピクピクしてきた♡」  
「またイキそうなんだね♡ご主人様♡じゅずっ、ジュルルルズツ♡」  
「喉出して出して♡ご主人様の好きな所でいいからいっぱい出して♡」



二人「んっああああああんっ♡♡♡」  
「暁「すんすん」はぁいいい臭い♡この臭いを嗅いでると  
暁のおマンコも熱くなってきちゃうわ♡」

響「これじゃ、お掃除「フェラ」の意味がないね♡  
これはお風呂で体を洗いながらまた「お掃除」をした方がいいかな♡」

「暁「それいいわね」お風呂だったら暁達の全身を使ってお掃除ができるものね♡」  
「響「そうと決まったら、早くお風呂場に行こう」ご主人様♡」  
「二人「お掃除が終わったら、今度はベッドで「寝美」が欲しいな」ご主人様♡」



「主人様、この後の予定はあるのかい？」

「それなら今日こそは、暁達のご奉仕で主人様をメロメロにしてやるんだから♪」

「主人様に喜んでほしくて夜中に必死に練習してたもんね♪」

「いつも練習に付き合わされて私までフェラが上達したと思うよ♡」

「主人様の前では言わないって約束でしょ!!」  
「裏でこっそり練習してたとかレディとして恥ずかしいじゃない!!」  
「ふふっ、ごめんごめん♪」  
「それじゃあ、練習の成果をしっかりと主人様にもせないかね♪」

